

《 展 示 という 諸 行 為 》



2017「オオカミの眼」展示風景 BLOCK HOUSE (東京)

展示という言葉は多くの場合、展示室で作品が陳列された状況を指すことが多いですが、当然ながら展覧会に参加するにあたってはその限りではなく、むしろ作品が展示室に在る状況というのは例えばプロジェクト全体にとってほんの一部の出来事であり、また終着点でもありません。そこで、展示という状況を理念と実践という経験の重なり合いとして考えてみたいと思います。1回目は2009年から2019年現在までの10年間の鑑賞体験とリサーチ、あるいは制作に携わった国際展・美術館展等の事例報告と、そこにみえる問題点の検証を行います。2回目はそれを踏まえ、鑑賞した理念を展覧会としてどのように形づけられるかを考えます。

7月10日 (水) 展示という諸行為Ⅰ：鑑賞する理念 / 国際展・美術館展の事例報告から

7月24日 (水) 展示という諸行為Ⅱ：実践としての企画 / どのように制作するか

17時40分～19時20分 金沢美術工芸大学 視聴覚教室 (本館棟2階) にて。聴講自由。

講師 大下 裕司 (おおした・ゆうじ)

1987年横浜生まれ。大阪中之島美術館準備室学芸員。ヨコハマトリエンナーレ2017アシスタント・キュレーター、横浜美術館学芸員などを経て現職。専門は現代美術史、先住民族文化論。これまでに札幌国際芸術祭2014、東京アートミーティングVI (2015、東京都現代美術館) などの企画に関わったほか、「ラッセン展」(2012、東京、共同企画)、「北加賀谷クロッシング - Mobilis in Mobili-」(2013、大阪・東京・金沢に巡回、共同企画)、「オオカミの眼」(2017、東京)、スクリーニングプログラム「野生復帰訓練」(2019、金沢、芸宿にて開催中)などを企画。